

## 巻頭言 「神にのみ栄光あれ」

宇野 元

キリスト教会は、歴史と場所のひろがりをもつ豊かな共同体です。家にたとえるなら、たくさんの部屋をもつ大きな家であると言えます。カトリックと東方正教会は、いずれも大きな部屋です。私たちが学ぶに値する宝がたくさんあります。大きな共同体のなかで、プロテスタントは、それより小さな部分を占めます。改革派教会は、その中のまた一部分をなしています。そして日本キリスト改革派教会は、世界の改革派・長老派ファミリーのなかの小さな部分です。ひとくちに「改革派」といっても、さまざまです。多様な歴史をもち、多彩な展開を作っています。私たちは大きな家の部分。自らの場所を確かめ喜びとするとともに、つつしみ深くあるよう招かれます。

主日に私たちが捧げる歌は、キリスト教会の豊かさを示します。『讚美歌』も『讚美歌 21』も、異なる伝統や信条に身をおく作者たちによる、多様な歌からなります。教派の枠をはるかにこえています。多様性と一致。主にあって「信仰はひとつ」(エフェソ 4, 5)。このことが、毎週の礼拝において実現しています。私たちはこの事実にあずかり、参加しています。

ヨハン・セバスティアン・バッハの音楽は、キリスト教会のこの特色をよく表しています。バッハ自身はルター派のキリスト者で、みずからの教派の信条と改革派のそれとの区別を理解していましたが、当時のカトリック教会との論争を知っていました。また、今もあり、当時もあった、保守的な傾向と進歩的な傾向の間に生まれる摩擦についても知っていました。しかし、彼がつくった音楽には、立場のちがいを超えた多様なありかたがひとつに結ばれています。

バッハが自筆スコアに *Soli Deo Gloria* 「神にのみ栄光あれ」という言葉を書きつけたのは、よく知られています。彼は聖書をよく読み、神を敬い、愛することを学びました。神にのみ栄光あれ。彼の音楽はこのことに導かれ、躍動しています。神にのみ栄光あれ。この言葉は、一方で、誤って私たちを対立や争いに駆り立てる言葉にも用いられます。熱狂を助長する言葉にもなります。私たち人間は互いに異なる存在でありながら、それにもかかわらずひとつ——このことを知るときにこそ、この言葉を正しく理解することができるでしょう。そして持ち場において、ささやかであれ、神の愛を証する言葉を探し求めるようみちびかれます。